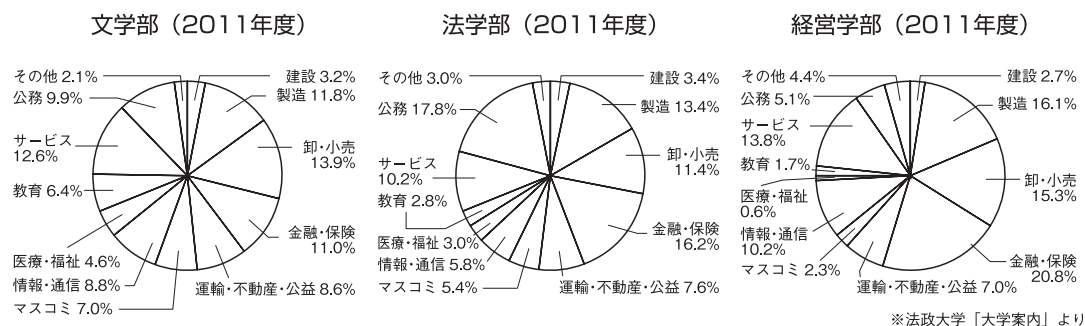
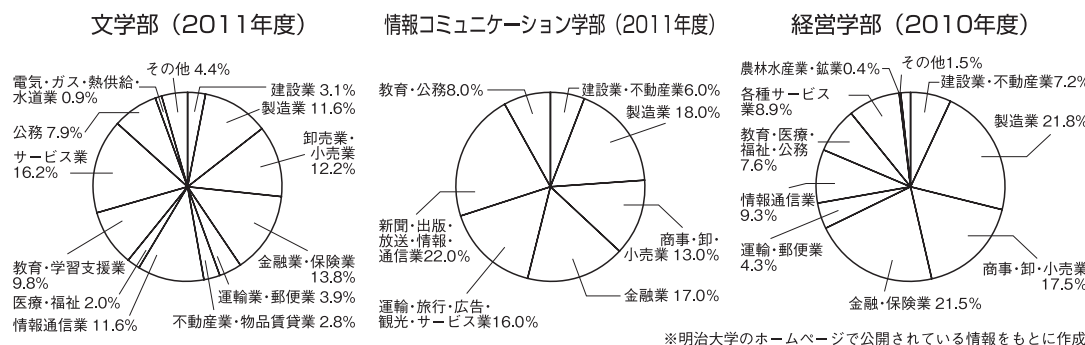


〔法政大学就職状況（一部）〕



〔明治大学就職状況（一部）〕



特集

「文学部は就職に弱い」は本当なのか？

大学全体の就職率を開示する大学はあっても、大学内の学部ごとに就職率を示す大学はあまりない。文学部は就職に弱いと言われるが、実際はどうなのか。「文学部が就職に弱いというイメージは間違っている」と、法政大学文学部はイメージの刷新に努めている。文学部の学生の就職について調べ、高校の進路指導の観点から論点を整理してみた。

文学部生のキャリア意識を大学が育んでいるか？

一般に、実業界に強く結びつく学部の学生は、就職に有利だと考えられている。経営学や商学部、経済学部、工学部などの学生は、専攻した専門分野に直結する仕事を志望すれば、就職の面接などで志望理由をストリートに説得力を持って主張できる。専門分野と重ねなくても、実業に関することを学んでいれば、就職面接などでアピールする材料は見つけやすい。

一方、実業の世界とは距離感のある学部は、どうなのだろう。一概に、就職に弱いと言えるのだろうか。ある芸術学部の教授は、就職率が高くないことを明らかにしながら、「大学卒業後も芸術活動を本格的に続けたいと考える学生が少なからずいて、その活動を卒業後に実践することとは決して悪いことではない」と強調していた。確かに、このような学生を「就職しない不真面目な学生」と非難するのはナシセンスだ。むしろ大学で培っ

た専門性をさらに究めようとする真摯な行動とも評価できる。企業に就職した学生の多寡で異なる学部を比較するのは、意味がないのかもしれない。

また、後述する法政大学の文学部に話を聞くと、文学部の就職率は、同大学内の文系学部と比べて、ほとんど変わらないという。率が一番良い経営学部に比べても、数ポイントの差しかないとのこと。同学部の後藤篤子教授は、「文学部が就職に弱い」というイメージは誤っている」と訴える。

これまでキャリアカウンセラーや就職アドバイザーなどに取材してきたが、異口同音に学部によって就職に差がつくことはないと言っていた。おそらく、文学部というだけで、学生が就職活動で極端に不利になることはないと思われる。

ただ、人文系や芸術系の学部の学生は、普段の授業からは実業界が求める能力や感性を知る機会が少ないとは考えられる。重要なのは、大学入学後の早い段階で長期的なキャリアを考え、

実現するにはどんな能力が必要で、卒業後にどのような働き方や活動の仕方があるのかを、学生が自ら考えようとする意識を持つことだと思われる。

キャリアを自ら考えることは、どの学部に進学しても大切なことだが、実業からは距離のある学部に進学した学生は、より意識した方がよいだろう。高校の進路指導の現場では、文学部や芸術学部などへの進学を希望する生徒には、志望先が学部別のキャリア指導をしているかを事前に確認させておくのは有意義なはずだ。例えば、中央大学の文学部は、キャリアデザイン科目を用意し、文学部生が自分のキャリアを考える上で参考になるテーマを、さまざまなゲストを招くなどして説明したり、ディスカッションしたりしている。

また、法政大学文学部では、全学共通のキャリア教育のほかに、「文学部生のキャリア形成」という科目を学部内で開講し、文学部卒業生を各回のゲスト講師に迎えて話してもらい、文学

部で学んだことが社会でどう生かされるのかを考えられる機会を設けている。

高校の進路指導上で必要なのは、生徒に自分のキャリアをしつかり考えさせて、大学進学後も引き続き努力するように指導することだと思われる。また、人文系や芸術系など、実業界から距離のある学部を志望する生徒には、大学入学後もキャリア意識を強く持ち続けることをしっかりと助言しておきたい。

また、学部によって卒業生の就職状況に違いがあると伝えておくことも、キャリアを考えさせるときに有意義だと思われる。同じ文系学部でも、学生の進路は学部によって傾向が異なる（上のグラフ）。多くの大学は、学部別の就職状況をホームページで公開しているので、見比べると、教育に就職する学生が多いとか、公務員の就職が多いなど、気付くことが多い。生徒が志望学部の卒業生の就職先を確かめる視点を持たせることは、キャリア教育の面でも役立つと思われる。

文学部が鍛える社会人力

法政大学文学部のケース

文学部だからこそ鍛えられる社会人力がある——法政大学文学部は、昨年7月、「文学部で培う社会人力」と題したシンポジウムを開催した（左写真）。

学部内の教員をはじめ、企業の人事や労務に詳しい大学院の教員、他大学の文学部の教員、



法政大学市ヶ谷キャンパスで2012年7月21日に開催された文学部主催のシンポジウム「文学部で培う社会人力」の様子。

小論文の指導で著名なインストラクターが登場。後半は、金融やゲーム業界など、さまざまな分野で働く4人の卒業生がパネリストになって、文学部で身に付けた力が、どのように仕事で役立ったかをディスカッションした。東京の市ヶ谷キャンパス内の会場には、学内外から100人ほどの聴衆が集まった。法政大学は近年、学生の就業力育成に力を入れていて、文部科学省が行っている「大学生の就業力育成支援事業」にも採択されている。

この活動で中心的な役割を果たしている藤村博之教授（社会人向け大学院「イノベーション・マネジメント研究科」所属）もシンポジウムで講演。企業などで働くときに必要とされる能力は「文書作成力」「情報収集・分析・発信力」「状況判断・行動力」の三点だと指摘し、大学教育の核心は、論理的に考え、

議論を通して理解を深めることにあり、この訓練が職業生涯の基礎体力となると主張した。そして、論文を書くことは、この能力を培う象徴的な行為であり、卒論を重要視している文学部は、企業で必要とされる能力を鍛えられる学部だと評した。

文学部が自ら就職の強さをアピールするのは、新しい動きだ。どのような背景と意図があったのか、シンポジウムを企画した同大学文学部の後藤篤子教授（史学科）と小林ふみ子准教授（日本文学科）に尋ねた。

人間を見つめる力が社会に出てから役立つ

——このイベントを企画した狙いは何だったのでしょうか？

後藤 文学部は就職に弱いという誤ったイメージを正したかったからです。実際の就職状況は、他の文系学部とほとんど変わりません。お金よりも自分のやりたいことにこだわる文学部生の氣質を今の学生にも感じますが、多くが自分に見合った就職先をきちんと見つけてきます。

先生から提案があり、文学部設立90周年の事業の一環としてシンポジウムを開くことを決めました。

——そのシンポジウムで、文学部の卒業生が登場していましたが、どう思われましたか。

後藤 ささまざまな分野で活躍しているな、と改めて思いました。私が強く思ったのは、文学部は人間を扱う学問を学ぶところであり、学生は人間を深く見る力が身に付けられるということです。社会人になったとき、この力が上司や顧客との信頼関係を築くときに役立っていますね。

小林 私もそう思いました。人間は、必ずしも合理的な判断をするとは限らない、矛盾した存在ですよね。このことを文学部の学生は、さまざまな資料や史料、実習、実験、分析を通して知るんです。そして、文学や哲学、歴史、心理などを通して、人間を複合的に理解し柔軟に対応できる力を育む。それが、人間理解や人間関係の構築に役立って得るという実例を、卒業生から見ることでできました。

一生懸命に学べる学部だから社会人力も身に付く

——文学部に入学しても就職で不利になることはないでしょうか？

小林 本学は近年、学生の就業力育成を向上させようと全学的に取り組んでいます。その基本的な考え方は、どんな学問を専攻しようとも、学生が大学で一生懸命に学べば身に付く汎用的な力こそが就業力につながっていくというものです。企業もそれを求めている。とうことは、一生懸命に頑張れる学部を選ぶのが、就業力を育むことに一番効果的だということです。

私は、日本文学科の学生の受験行動を調査したのですが、約35%が本学の日本文学科の専願（付属校、指定校推薦、自己推薦入学者など）で、約45%が複数の大学の日本文学科を受験していました。約8割が日本文学科だけを受験していたんです。この傾向は史学科や哲学科なども同じだと思えます。文学部は、学びたいことを強く意識して入学する学生が多いんです。

後藤 ゼミや論文があつて大変かもしれないけれど、自分で自ら選んだからこそ頑張れるし、頑張れるからこそ力が付く。それが社会人力になると私たちは考えています。実際に、卒業生の多くが他の学部の学生と同じように就職しています。

——高校の進路指導の現場に伝えたいことはありますか？

後藤 文学部が就職に弱いというイメージは、ぜひ改めていただきたいですね。少なくとも、本学の文学部であれば、しっかり社会人力を鍛えます。この文学部は、全学生に卒業論文を書くことを課し、低学年からゼミを始めます。また、基礎ゼミと呼ぶ少人数の初年次教育もやっています。学生は一生懸命にやらざるをえないんです。すると、自ら調べものをするようになり、うまくまとめて発表したり、先行研究を批判的に考察して自分なりに意見や視点を作れるようになっていきます。こんな力は、目の前の現象を自分なりの見方で分析して意見を言える力になり、企業などでも評価される力

小林 このシンポジウムの企画の発端は、私が受験生のことをもっと知ろうと、学生主導のオープンキャンパスに立ち会ったことでした。受験生や保護者から、予想以上に文学部の就職についての質問が出て、保護者からは「学校の先生や出版社の編集者以外の就職が文学部でできるものなのですか」というような質問も出ていたんです。中には、高校の先生から反対されたという声もありました。

後藤 昔の文学部のイメージが、根強く残っているんですね。私は教育大学の出身で、高校の先生になった友人たちに話を聞けば、やはり「文学部に行く就職が難しいから生徒にすすめにくい」と言われます。このイメージギャップをなんとか埋めたいと考え続けていたところ、小林



法政大学文学部史学科 後藤篤子 教授



法政大学文学部日本文学科 小林ふみ子 准教授

になるはずですが。

小林 批判的な能力を育むことは、大学教育の根幹です。この力は、ゼミで議論したり論文を書いたりすることで鍛えられます。高校の先生にぜひ知っていただきたいのは、ゼミの履修率や卒論の執筆率は、学部によって大きく異なるということです。ゼミや卒論が必修でない学部が今増えている、一部の優秀な学生だけがゼミに入って卒論を書くというケースもあります。ゼミも卒論も必修にすると、教員も学生も大変なのですが、苦勞するからこそ、批判能力も社会人力も身に付くんです。文学部に限らず、一生懸命になって、大変な思いをして自分を成長させられるところが、最良の進路先になるのだと思います。

（取材・構成／宇津木聡史）